

「達磨さま」

平成21年 10月 第3週放送

けさ
今朝は、ダルマさまのお話をいたします。

先日行われた選挙のニュースの中で事務所に飾られたダルマさんや、当選者がダルマさんに目を入れるシーンが多く見られました。また、一月に高崎^{たかさきし}市で開催させるダルマ市では、縁起物^{えんぎもの}として町を賑^{にぎ}わせている、あのダルマさんです。

ご存じの方もたくさんいらっしゃると思いますが、

ダルマさまは、正式^{せいしき}には、菩提達磨^{ぼだいだるま}といい、歴史上^{れきしじょう}の、それも曹洞宗^{そうどうしゅう}にとっては、欠くことのできないお釈迦^{しゃか}さまから数えて二十八代^{にじゅうはち}目の人物です。

これから、達磨さまについて伝えられているエピソードを基^{もと}にお話したいと思います。

南インドの王国の第三王子^{だいさん}として生まれた達磨さまは、お釈迦^{にじゅうしち}さまから二十七代^{はんにやたらそんじや}目の般若多羅尊者^{はんにやたらそんじや}の弟子^{でし}となり出家^{しゅっけ}をしました。

その後、般若多羅尊者^{せいしき}の正式^{あとつ}な跡を継いで、国中^{せっぽう}を説法^{りょう}してまわり、六世紀初めの頃、中国の梁^{りょう}という国に渡り、武帝^{ぶてい}という皇帝^{こうてい}に会いました。そこで有名な禅問答^{ぜんもんどう}が行われたのです。

武帝^{あと}との問答^{ようすこう}の後、達磨さまは、揚子江^{すうざん}を渡り、崇山^{しょうりんじ}の有名な少林寺^{くねんかん}にて、九年間^{かへ}ひたすら壁に向かって坐禅をし続けた、と言われております。

ある日、慧可^{えか}という弟子が坐禅を続ける達磨さまに「私はいま、安らぎ^{やす}を得^えていませんので、何とか心^{やす}の安らぎ^えを得たいのです。」と願い出ると、達磨さまは「ではその心^{こころ}を持ってこい。」といました。

おどろいた慧可は心を探しますが、「心はとらえようがないので、もってくることはできません。」

すると達磨さまは「これできみは、心が安らぐことができた。」とお答えました。

心とは何かをよく観察^{かんさつ}してこいと言うわけです。実体^{じったい}のない心を坐禅という修行によってとらえ、安らぎを得ることを示されたのです。

中国に坐禅という、正式な修行を伝えた達磨さまは、十月五日^{じゅうがついつか}に亡くなられたとされています。その日、大本山^{だいほんざん}などの曹洞宗のお寺では、達磨さまの徳を偲び「達磨忌」という法要^{しのだるまき}を営^{ほうよう}みます。

達磨さまのご生涯^かについては分からないことや伝説がたくさんありますが、曹洞宗にとっては欠かせない人

物であったことは間違いありませんし、お釈迦様の二十八代目の正式な跡^{あと つ}を継ぎ、禅を中国に伝えたことも間違いありません。曹洞宗の教えは、お釈迦さまから達磨さまへ、そして道元^{どうげんぜんじ}禅師、瑩山^{けいざんぜんじ}禅師へと伝えられた教えであります。

その教えの中心は、坐禅です。是非、お近くのお寺で、達磨さまの伝えた坐禅を体験してみませんか。